

「自転車をこぐ」の「自転車」はペダルを表すメトニミーか

平 塚 徹

要 旨

従来、「自転車をこぐ」の「自転車」は《ペダル》を指示するメトニミーだと言われてきた。しかし、「自転車をこぐ」とは、単に自転車のペダルをこぐことではない。むしろ、ペダルをこぐことによって、自転車を推進することである。そして、「自転車」は《自転車》そのものを指示していると考えべきである。

山本(2013)は、「自転車をこぐ」をSメトニミーとして分析する。しかし、この分析には、以下の二つの問題点がある。

- ①「自転車」が《自転車》を指示しつつ、《ペダル》を表すという乖離が起きている。
- ②「自転車をこぐ」全体が《自転車を推進する》ことを含意するメカニズムが明示的に示されていない。

これに対して、本稿は、「自転車をこぐ」の「自転車」はメトニミー的表現ではなく、「こぐ」の方がメトニミーにより《ペダルをこいで(目的語の指示対象である)自転車を推進する》という意味になっていると考える。

以上のことは、「自転車をこぐ」と同様に分析されてきた「電球が切れる」や「洗濯機をまわす」などの他の表現にも当てはまる。また、「寿司・おにぎりを握る」の「握る」のような作成動詞の派生も同じプロセスにより生じている。さらに、《酒宴を催す》ことを表す「張る」や、「掻く」を語源とする「書く」は、動詞のメトニミーにより派生した意味がさらに変化して生じたものである。

キーワード：メトニミー、アクティブ・ゾーン(活性化領域)、多義性、意味変化、作成動詞

1. はじめに

メトニミーというのは、古来より知られている修辞技法のひとつであり、ある概念を指示するのに、それに関連する概念を指示する語句を用いるものである。例えば、赤い頭巾をかぶっている女の子を指すのに、「赤ずきん」という語句を用いるような場合である。この例では、かぶっているという関係に基づいたメトニミーであるが、その他にもさまざまな関係に基づいたメトニミーがある。例えば、西洋人を「青い目」と呼ぶ場合は、全体を部分で指示しているし、アメリカ政府を「ワシントン」と呼ぶ場合は、機関を所在地で指示している。

伝統的な修辞学では、メトニミーは「言葉の綾」あるいは「文彩」つまり装飾的な表現と見なされてきた。しかし、現代の認知言語学においては、認知的な基盤を有しており、日常言語に広範に見られる現象と考えられるようになった。例えば、次の表現もそのような日常的なメトニミーとみなされている。

(1) 自転車をこぐ

この表現においては、実際にこいでいるのは自転車そのものではなくペダルなので、「自転車」はペダルを指示しているというのである。

しかし、このような説明に対して、言語学者の西村義樹と哲学者の野矢茂樹の対談形式により認知言語学を紹介する本において、野矢は西村に疑問を呈する。

野矢 だけど、「自転車をこぐ」は本当は自転車をこいでるんじゃないじゃなくてペダルをこいでいるんだってというのは、私には違和感があります。「自転車をこぐ」という言い方で言いたいのは自転車のことで、ペダルのことじゃないでしょう。だから、「自転車をこぐ」の「自転車」は文字通りに自転車のことだと思うんですよ。ペダルなんかじゃなくて。そうすると、むしろ「こぐ」の方が比喩的なんじゃないですか。「自転車をこぐ」の「こぐ」は、自転車のある仕方では動かすことを意味している。そんなふうに考えられませんか？

西村 実は、私もそう考えたいと思っているんです。動かして前進させるのは、自転車だろうと考えられるので、そうすると、こいだのも自転車だろう、と。

野矢 ぼくもそっちの方が自然な感じがするな。「自転車」という語でペダルを意味しているというのは、どうも違和感がある。
(西村・野矢 2013: 145-146)

ここでは、「自転車」ではなく、むしろ「こぐ」の方が意味が変わっているという見方が提案されている。「こぐ」の意味を、野矢は、「自転車のある仕方では動かすこと」としているが、「ある仕方」の内容を明示すれば、《ペダルをこいで自転車を動かす》ことになるであろう。

同様のことは、次の表現にも言える。

(2) 電球が切れる

ここでは、「切れる」のは電球そのものではなくフィラメントなので、「電球」は《フィラメント》を指示していると説明される。しかし、そうではなくて、「切れる」が《フィラメントが切れて電球が故障する》ことを表していると考えられることができる。

次の表現も同様である。

(3) 洗濯機をまわす

これも、「洗濯機」が《パルセータ（洗濯槽の底にある羽根）》を指示していると説明される。しかし、「まわす」が《パルセータがまわるように洗濯機を作動させる》ことを意味していると考え

えることができる。

これらの表現について、西村・野矢は、次のように述べる。

野矢 さっきの「電球が切れる」「自転車をこぐ」「洗濯機をまわす」なんかは、「電球」がメトニミーなのか「切れる」がメトニミーなのかどちらともとれるものでしたが、捉え方によっては「切れる」「こぐ」「まわす」という動詞がメトニミー的に使われていると言えるわけですね。

西村 そうですね。[以下略]

(西村・野矢 2013: 148-149)

野矢は、「自転車をこぐ」の「自転車」がメトニミーによってペダルを意味するという考え方に対して、「こぐ」の方がメトニミーによって「自転車をある仕方で動かすこと」を意味しているという考え方を提案したが、結局のところ、そのように捉えることができると言うにとどまっている。そして、その後、筆者の知る限り、野矢のこの提案を検討する研究は行われていない。しかし、本稿では、この提案こそが正しいことを主張する。

ここで、次の文を見られたい。

(4) John heard the piano. (Recanati 2004: 34)

Recanati が述べるとおり、この文には二通りの分析が考えられる¹⁾。

- (5) ピアノではなく、ピアノの音が聞こえるのだから、piano は《ピアノ》という楽器を意味しているのではなく、メトニミーにより、《ピアノから発せられる音》を指示している。
- (6) piano は《ピアノ》という楽器を意味している。むしろ、hear の意味が、《(目的語の指示対象である) 物体が発する音が聞こえる》という意味に変わっている。

Recanati は、後者の分析を支持する証拠を挙げている。

(7) I can both hear and touch the piano. (Recanati 2004: 35)

この文では、piano は、動詞 touch の目的語であるから、ピアノという楽器そのものを指していると言える。すると、piano が《ピアノから発せられる音》を指示しているという分析は不適切であり、むしろ、hear の意味が《(目的語の指示対象である) 物体が発する音が聞こえる》という意味に変わっているという分析が適切だということになる。

本稿は、「自転車をこぐ」についても、「自転車」は《自転車》そのものを指していて、「こぐ」

の意味が《ペダルをこいで（目的語の指示対象である）自転車を推進する》という意味に変わっていると主張する。「こぐ」のこの意味変化は、ある行為を表すのに、その行為に含まれる動作を表す動詞を用いているので、全体を部分で表すメトニミーと考えることができる²⁾。「こぐ」には、本来の意味とメトニミーによる意味があり、多義的だと言える。

2. 瀬戸（1997）

瀬戸（1997: 185-187）は、「自転車をこぐ」の「自転車」は、「こぐ」を媒介にして《ペダル》を指示するとしている。しかし、「自転車をこぐ」は単に《（自転車の）ペダルをこぐ》ことを意味しているだけではないとも述べている。というのも、「ペダルをこぐ」では意識がペダルに集中しているのに対して、「自転車をこぐ」では自転車全体も意識されているからである。その結果、意識は自転車とペダルの間を往復することになる。そして、「自転車をこぐ」は《ペダルを漕いで前進する》ことをも意味することになる。

このような例を踏まえて、瀬戸は全体で部分を表現するメトニミーについて、全体は動詞などにより部分を指示するが、伝達の主眼は全体であると一般化する。この種のメトニミーは、全体と部分の二重性に支えられた表現である。その結果、何らかの仕方で全体が関わる意味が得られる。「自転車をこぐ」で考えると、「自転車」は「こぐ」を媒介にして《ペダル》を指示するが、伝達の主眼は自転車全体にあり、その結果、《ペダルをこいで自転車を前進させる》ことをも意味することになる。

しかし、「自転車をこぐ」が結局のところ《ペダルをこいで自転車を前進させる》ことを意味するのであれば、ここで、野矢の先の疑問を提起することができる。つまり、「自転車をこぐ」においては、「自転車」がペダルを意味しているのではなく、「こぐ」が《ペダルをこいで（目的語の指示対象である）自転車を前進させる》ことを意味しているのではないだろうか。

3. 「自転車」の指示対象

本節では、「自転車をこぐ」の「自転車」が《ペダル》ではなく、《自転車》を指していると考えた方が良いことを見る。

まず、「自転車」に修飾語をつけてみる。

(8) {金属製の／樹脂製の} 自転車をこぐ

この文は、金属製や樹脂製なのは自転車全体であると解釈される。もし、「自転車」が《ペダル》を指しているのであれば、ペダルだけが金属製や樹脂製だと解釈できないことを説明する必要

が出てくる。

「電球が切れる」でも同じである。

(9) A社の電球は切れやすい。

このように言った場合、電球自体がA社の製品であり、A社のフィラメントを使った電球は切れやすいという意味にはならない。「電球は切れやすい」の「電球」が《フィラメント》を指すとすると、なぜ、フィラメントだけがA社製だとはならないのか説明が必要になる。

次に、関係節化を試みる。

(10) 彼がこいでいる自転車はフランス製だ。

「自転車をこぐ」の「自転車」が《ペダル》を指しているならば、「彼がこいでいる自転車」も《ペダル》を指していると考えることができる。しかし、(10)は、ペダルがフランス製だという意味ではなく、自転車全体がフランス製だと解釈される。

別の例を挙げる。「一升瓶を飲み干す」の「一升瓶」は、メトニミーにより、一升瓶の中身を指すとよく言われる。しかし、次のように言った場合、転がっているのは《一升瓶》そのものであり、その中身ではない³⁾。

(11) 飲み干した一升瓶が転がっている。

次に、代名詞による照応を見る。

(12) 彼は自転車をこいでいた。それは樹脂製だった。

ここでは、代名詞の「それ」は《自転車》そのものを指示していて、《ペダル》を指示しているとは取れない⁴⁾。

これらのことは、「自転車をこぐ」の「自転車」が《ペダル》よりも《自転車》全体を指していることを支持している。

4. 山本 (2013) の Sメトニミー

山本 (2013) は⁵⁾、メトニミーにおいて、「文字通りの意味 (literal meaning)」を「ソース」、 「意図された意味 (intended meaning)」を「ターゲット」と呼ぶ (p.348)。例えば、「赤頭巾」

通りの意味」で用いていながら、それとは別に「意図された意味」を設定するというのは、どういことであろうか。上述のとおり、山本は、メトニミーにおいては、「別のもの」が、その本来の意味ではなく、「あるもの」を表すために使われる」と述べている。ということは、Sメトニミーにおいては、指示対象以外のものを表していることになる。ここでは、「指示すること」と「表す」ことの乖離が見られる。このような乖離がなぜあるのか、山本は明示的には説明していない。

第二の問題点は、表現全体の意味がどのようにして出てくるのかが明示的に説明されていないことである。例えば、「自転車をこぐ」は、全体としては、《自転車を推進する》ことを含意している。しかし、Sメトニミー分析では、《自転車》は指示されているが、「述語が直接関与する対象」は《ペダル》だとされている。この場合、《ペダルをこぐ》ことが含意されることは説明される。しかし、全体として、《自転車を推進する》ことが含意されるメカニズムは明確でない。

Sメトニミー分析には、暗黙の前提がある。それは、「自転車をこぐ」においては、「自転車」がメトニミー的表現であり、「こぐ」は本来の意味のままであるという前提である。「こぐ」が本来の意味のままだと、動作の対象は《ペダル》だと考えざるをえない。ところが、「自転車」の指示対象は《自転車》そのものであると考えるべき根拠がある。そこで、指示対象である《自転車》をソースとし、「述語が直接関与する対象」である《ペダル》をターゲットとするメトニミーを考えることになる。だが、この説明では、上述のとおり、指示対象であるソースの他にターゲットを設定せざるをえないし、表現全体の意味がどのようにして出てくるのかも明示的に説明されない。

本稿では、このような暗黙の前提にとらわれることなく、「自転車をこぐ」においては、「自転車」はメトニミー的表現ではなく、「こぐ」がメトニミーにより《ペダルをこいで（目的語の指示対象である）自転車を推進する》という意味になっていると考える。こうすれば、「自転車」は文字通りの意味で用いられているだけで、指示対象であるソースと別にターゲットを仮定する必要はない。また、表現全体が《自転車を推進する》ことを含意することも、「こぐ」の新たな意味から明示的に説明される⁶⁾。

Sメトニミー分析では、《ペダル》は「述語が直接関与する対象」であったが、このようなことを考える必要もない。「こぐ」が《ペダルをこいで（目的語の指示対象である）自転車を推進する》という意味であるから、《自転車》自体が「こぐ」という動作の対象である。《ペダル》は、「こぐ」の意味に含意されている要素に過ぎない⁷⁾。

山本（2013: 362-363）は、Sメトニミーにおいては、述語に選択制限が見られるとしている。例えば、「風車が回っている」は、風車という全体をソース、羽根という部分をターゲットとするSメトニミーであるが、このメトニミーの成立は述語に依存している（(19)の容認性判断は、Sメトニミーとしてのものである）。

(18) 風車の羽根が {回っている／折れた／吹き飛ばされた／*倒れた}。

(19) 風車が {回っている／?折れた／?吹き飛ばされた／*倒れた}。

「自転車をこぐ」だと、例えば、以下のような対比になる（(21)の容認性判断は、Sメトニミーとしてのものである）。

(20) 自転車のペダルを {こぐ／回す／外す}

(21) 自転車を {こぐ／?回す／*外す}

しかし、このことは、名詞句のSメトニミーではなく、動詞の意味によるものだと考えるべきである。例えば、「こぐ」は、「自転車」を目的語に取った場合は、「ペダルをこいで（目的語の指示対象である）自転車を推進する」という意味があるが、「回す」には、ペダルを回して（目的語の指示対象である）自転車に対して何かをすることを表す用法はない。「外す」についても同様である。また、「回る」は、「風車」を主語に取った場合、「羽根が回って（主語の指示対象である）風車が運転する」という意味があるが、「折れる」には、羽根が折れて（主語の指示対象である）風車に何かが起こることを述べる用法はない。「吹き飛ばされる」や「倒れる」についても同様である。

5. 派生的作成動詞

目的語の指示対象を作成することを表す動詞を作成動詞と呼ぶ⁸⁾。例えば、「作る」や「作り出す」は本来的な作成動詞である。しかし、作成動詞には、作成動詞でない動詞が転用されて作成動詞になったものが多く存在する。例えば、「握る」は、本来、何かをしっかりと手の中に収めることを表す。

(22) 棒を握る・ボールを握る

しかし、「握る」は作成動詞にもなる。

(23) 寿司を握る・おにぎりを握る

「握る」の作成動詞としての意味は、「握る」が本来表している動作をすることによって、寿司やおにぎりを作ることである。

以下も、このような派生的作成動詞の例と考えられる。

- (24) クッキーを焼く
- (25) 天ぷらを揚げる
- (26) 餅をつく
- (27) 粉をひく
- (28) 能面を彫る
- (29) 鶴を折る
- (30) 手袋を編む
- (31) 井戸を掘る

これらの表現も、何かを作ることを表すのに、その行為に含まれる動作を表す動詞を用いている。これは、部分で全体を表すメトニミーの一種である。このメトニミーが、動詞の本来の意味と作成動詞としての意味の多義性を生み出しているのである。

このような作成を意味する表現は、実は目的語名詞のメトニミーとして説明できると思われるかもしれない。例えば、「寿司を握る」の場合、握る対象は《シャリとネタ》であるので、「寿司」は実は《シャリとネタ》を指示していると考えるのである。だが、このような考え方は適切ではない。例えば、(28)の「能面を彫る」の場合、この考え方に従えば、「能面」は《木》を指していることになる。しかし、「能面を彫る」は、端的に言えば《能面を作る》ことを意味している。もし、「能面」が《木》を意味しているとする、「能面を彫る」は単に「木を彫る」ことを意味していて、なぜ、《能面を作る》ことを意味するのか説明できない。(29)の「鶴を折る」、(30)の「手袋を編む」、(31)の「井戸を掘る」も、それぞれ、単に、《紙を折る》こと、《糸を編む》こと、《土を掘る》あるいは《地面を掘る》こと意味していて、なぜ、《鶴を作る》こと、《手袋を作る》こと、《井戸を作る》ことを意味するのか説明できない。

この問題は、山本のSメトニミー分析を適用しても残る。「能面を彫る」の場合、Sメトニミー分析を適用するなら、「能面を彫る」の「能面」の指示対象は《能面》である一方、《木》が「述語が直接関与する対象」となる。「彫る」は本来の意味で使われていて、単に《木を彫る》ことを意味していることになる。《能面》は指示対象として出てきているものの、《能面を作る》という意味がどうして出てくるのか説明されない。「鶴を折る」、「手袋を編む」、「井戸を掘る」も、それぞれ、「折る」、「編む」、「掘る」が本来の意味で用いられていて、《鶴を作る》、《手袋を作る》、《井戸を作る》という意味がどうして出てくるのか説明されない。

「能面を彫る」が《能面を作る》ことを意味するということは、「能面」の指示や意味だけでは説明できない。「彫る」自体が《作る》という意味を含んでいるとしなければ説明できないのである。つまり、「能面を彫る」の「彫る」は、《素材を彫って(目的語の指示対象である)何かを作る》ことを意味しているのである。そして、このように考えれば、もはや、「能面」は単に《能面》を指示しているだけであり、その意味についてメトニミーを仮定する必要はないの

である。同様に、「鶴を折る」の「折る」は《紙を折って（目的語の指示対象である）何かを作る》ことを、「手袋を編む」の「編む」は《毛糸を編んで（目的語の指示対象である）何かを作る》ことを、「井戸を掘る」の「掘る」は《土・地面を掘って（目的語の指示対象である）何かを作る》ことを表しているのである。

特定分野で用いられる派生的作成動詞もある。高温で溶かしたガラスを管の端に巻き取り、反対側から息を吹き込んでガラスを形成する「吹きガラス」という技法がある。これを「ガラスを吹く」と言うが、ガラスを吹いてガラス器を作ることを表すのに、「吹く」が用いられる。以下は、「小谷真三さんのコタニガラス」と題する文章からの引用である⁹⁾。

- (32) 明治時代には専業の職人が生活用品を吹くようになり、やがて、機械化された。
 (33) 今ではすっかり定番になったコップも、倒れずに置けるものを吹くまでがひと苦勞だった、と小谷さんはよく思い出話をされる。
 (34) 小谷さんはほかにも、ワイングラス、リキユール瓶、鉢など多種多様なうつわを吹く。

これも、派生的作成動詞と言える。

このような派生的作成動詞が創造的に作り出されている例もある。次は、みかんの皮を動物の形になるようにむく方法を紹介している書籍『あたらしいみかんのむきかた』からの用例である⁽¹⁰⁾。

- (35) 干^ま支^とをむくよ。(p.10)
 (36) つぎは、りゅうをむいてよ。(p.42)

ここでは、「むく」は《みかんの皮をむいて（目的語の指示対象である）何かを作る》ことを表している。同書では、実は、「むきあげる」という形が頻繁に出てくる。

- (37) そういつて むきみちゃんは しれっと うしを むきあげました。(p.12)
 (38) そういつて むきみちゃんはぺろっと りゅうを むきあげました。(p.16)
 (39) まるで りんごをむくかのように みごとなへびを むきあげました。(p.18)
 (40) むきみちゃんが しっぽを^{うへ}上にまいた しばけんを むきあげました。(p.28)
 (41) むきおくんは いかをむきあげました。(p.34)
 (42) むきおくんは くまをむきあげました。(p.40)

「あげる」は作成動詞について、完成することを意味する複合動詞を作る。

- (43) 作品を作り上げる
- (44) クッキーを焼き上げる
- (45) 餅をつき上げる
- (46) 鶴を折り上げる
- (47) 手袋を編み上げる
- (48) 井戸を掘り上げる

「むきあげる」はこのパターンに倣ったものだと言える。

以上のように、動詞のメトニミーは、作成動詞の派生にも関わっているのである。

6. さらなる意味変化

メトニミーにより派生した意味がさらに変化して、元の意味との連関が失われてしまった事例もある。例えば、動詞「張る」には、酒宴を催すという意味がある。

- (49) 宴を張る・祝宴を張る

『明鏡国語辞典』によると、この意味は幕を張って宴席をしつらえたことに由来する。そうすると、これらの表現においては、もともと、「宴」や「祝宴」が《酒宴のための幕》を表すメトニミーであったと考えることができると思われるかもしれない。しかし、現代においては、これらの表現に《幕》は関与していない。そうすると、「張る」の意味が単に《酒宴を催す》ことに変化したと考えざるをえない。このような意味変化は、「張る」がメトニミーにより《幕を張って（目的語の指示対象である）酒宴を催す》という意味で使われていたのが、酒宴の催し方が歴史的に変化した結果、《幕を張って》の部分が失われて、単に《酒宴を催す》という意味になったと説明される¹¹⁾。もともと目的語名詞のメトニミーだったと考えた場合には、このように説明することはできない。

同様に「張る」には、スポーツで強化合宿を行うという意味もある。

- (50) キャンプを張る・高地合宿を張る

これも、『明鏡国語辞典』によると、仮設テントなどを設けたことに由来するが、酒宴を催すという意味の場合と同様のことが言える。

意味変化の結果、元の動詞とは完全に別の語になっている場合もある。

(51) 文字を書く

この「書く」という動詞は「搔く」に由来するというのが通説である。つまり、物の表面を引っ搔いて、文字や符号をつけることから、「搔く」と言ったのである¹²⁾。この段階では、「文字を書く」の「文字」は《物の表面》を表すメトニミーだったという想定も可能だと思われるかもしれない。しかし、「書く」と言った場合、もはや、引っ搔くという動作は含意されない。書くには引っ搔く以外の手段が一般的になっているからである。つまり、「書く」は、単に文字や符号を記すことを表すようになってきているのである。この意味変化は、「書く」が、もともと、《物の表面を引っ搔いて（目的語の指示対象である）文字や符号を記す》という意味だったのが、書くための手段が変化するにつれて、《物の表面を引っ搔いて》の部分が失われて起きたのだと説明される。目的語名詞のメトニミーでは、このような説明はできない。

7. まとめ

従来、「自転車をこぐ」の「自転車」は《ペダル》を指示するメトニミーだと言われてきた。しかし、「自転車をこぐ」とは、単に自転車のペダルをこぐことではない。むしろ、ペダルをこぐことによって、自転車を推進することである。そして、「自転車」は《自転車》そのものを指示していると考えべきである。

山本は、「自転車をこぐ」をSメトニミーとして分析する。しかし、この分析には、以下の二つの問題点がある。

①「自転車」が《自転車》を指示しつつ、《ペダル》を表すという乖離が起きている。

②「自転車をこぐ」全体が《自転車を推進する》ことを含意するメカニズムが明示的に示されていない。

これに対して、本稿は、「自転車をこぐ」の「自転車」はメトニミー的表現ではなく、「こぐ」の方がメトニミーにより《ペダルをこいで（目的語の指示対象である）自転車を推進する》という意味になっていると考える。

以上のことは、「自転車をこぐ」と同様に分析されてきた「電球が切れる」や「洗濯機をまわす」などの他の表現にも当てはまる。また、「寿司・おにぎりを握る」のような作成動詞の派生も同じプロセスにより生じている。さらに、《酒宴を催す》ことを表す「張る」や、「搔く」を語源とする「書く」は、動詞のメトニミーにより派生した意味がさらに変化して生じたものである。

注

- 1) これは Langacker (1990: 193-196) の議論が元になっている。Langacker は、(i) から the sound of を削除して (ii) を生成するという統語的な分析の問題点を指摘した上で、(6) の分析を主張している。
- (i) She heard the sound of the piano.
(ii) She heard the piano.
- Recanati は、Langacker の議論の削除分析を、(5) のメトニミーによる分析に入れ替えている。
- 2) 名詞のメトニミーの場合には、ある概念を指示するのに、それに関連する概念を指示する語句を用いることという規定で構わない。しかし、動詞のメトニミーの場合には「指示」というのは問題がある。よって、メトニミー一般としては、ある概念を表すのに、それに関連する概念を表す語句を用いることと規定することになる。
- 3) 本稿の主張では、「飲み干す」が《内容物を全て飲んで（目的語の指示対象の）容器を空にする》という意味になっている。
- 4) 山本 (2008: 119) が同じ趣旨の指摘をしている。
- 5) 山本は、山本 (2008, 2010, 2012, 2013) でメトニミーについて議論を展開しているが、本稿では、山本 (2013) を取り上げる。
- 6) (16) や (17) では、ソースすなわち指示対象は、「物理的な全体」である「風車」や「自転車」である。しかし、山本は、Sメトニミーのソースすなわち指示対象は「物理的な全体」であるとは限らず、概念的構成物である場合もあるとしている。例えば、次の例では、下線部の指示対象は「やかん」ではなく、「やかん+湯」という総体だとしている。
- (i) The kettle is boiling.
しかし、そのような想定は必要ない。kettle は《やかん》を指示し、be boiling が《(主語の指示対象である) やかんが、中身の水が沸騰した状態になっている》という意味になっていると考えればよい。次の例についても、山本は下線部の指示対象は、「私+名前」だとしているが、このような想定も必要ではない。
- (ii) Im in the phone book.
ここでは、I は《私》を指示し、be in the phone book が《(主語の指示対象である) 人の名前と電話番号が電話帳に記載されている》という意味になっていると考えればよい。山本は、次の例についても、下線部の指示対象は「窓+開口部」だとしている。
- (iii) She came in through the bathroom window.
これも、window は《窓》を指示していて、through が《~の開口部を通して》という意味になっていると考えることができる。
- 7) この《ペダル》は、Langacker のいうアクティブ・ゾーン（活性化領域）である。他方、《自転車》はプロファイルであるから、アクティブ・ゾーンとプロファイルが一致していない。山本 (2013: 382) は、Sメトニミーによる分析は、Langacker のアクティブ・ゾーンとプロファイルの不一致による分析と同趣旨であるとしている。しかし、Langacker (1990: 193-196) による次の例（注1参照）の分析は、山本の分析よりも、本稿の分析に近い。
- (i) She heard the piano.
ここでは、ピアノがプロファイルであるのに対して、ピアノの音がアクティブ・ゾーンになっている。Langacker は、音を目的語に取る場合に対して、このようにピアノを目的語に取り、音がアクティブ・ゾーンになっている場合は、動詞 hear の意味が異なっているとしている。山本のSメトニミー分析は、アクティブ・ゾーンとプロファイルの不一致を、動詞の意味ではなく、名詞句の意味の問題として捉えようとしている。
- 8) 英語の creation verb の直訳である「創造動詞」という言い方もあるが、本稿では「作成動詞」とい

う用語を採用する。

- 9) 久野恵一 (2014) 「小谷真三さんのコタニガラス」『Discover japan』2014年4月号, p.267。
- 10) 岡田好弘・神谷圭介 (2010) 『あたらしいみかんのむきかた』東京：小学館。
- 11) 動詞「張る」が《幕》をアクティブ・ゾーンとして意味拡張した後、さらにアクティブ・ゾーンが消失するという意味変化があったことになる。
- 12) インド・ヨーロッパ語族の多くの言語においても、書くことを表す動詞が、引くことや彫ることなどを表す語に由来している (Buck 1988: 1283)。

参考文献

- Buck, C. D. (1988) *A dictionary of selected synonyms in the principal Indo-European languages*, Chicago: University of Chicago Press.
- Langacker, R. W. (1990) *Concept, image, and symbol : the cognitive basis of grammar*, Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Recanati, F. (2004) *Literal Meaning*, Cambridge: Cambridge University Press. [フランソワ・レカナティ (2006) 『ことばの意味とは何か：字義主義からコンテキスト主義へ』東京：新曜社]
- 瀬戸賢一 (1997) 『認識のレトリック』東京：海鳴社。
- 西村義樹・野矢茂樹 (2013) 『言語学の教室：哲学者と学ぶ認知言語学』東京：中央公論新社。
- 明鏡国語辞典 (2010) 東京：大修館。
- 山本幸一 (2008) 「介在性構文の分析：非自立型メトニミーとして」『日本認知言語学会論文集』8, 116-126.
- 山本幸一 (2010) 「メトニミーの下位区分：代名詞の照応現象の違いを通して」『日本認知言語学会論文集』10, 140-148.
- 山本幸一 (2012) 「メトニミーの2タイプ：参照点構造の精緻化を通して」『日本認知言語学会論文集』12, 211-222.
- 山本幸一 (2013) 「2つのタイプのメトニミーと参照点構造：メトニミー成立の必要・十分条件」『認知言語学論考』11, 347-386.

Is *jitensha* a metonymy for the pedals in the Japanese expression *jitensha o kogu* ?

Tohru HIRATSUKA

Abstract

It has been widely accepted that the noun *jitensha* "bicycle" is a metonymy for the pedals in the Japanese expression *jitensha o kogu* "pedal a bicycle" (because it is presupposed that the verb *kogu* basically takes *pedaru* "pedals" as its object). But, the expression *jitensha o kogu* does not simply mean "pump pedals", but also "propel a bicycle". It should be thought that the noun *jitensha* designates a bicycle itself.

Yamamoto (2013) analyzes *jitensha o kogu* as an instance of S Metonymy. But, this analysis has two problems:

(1) According to this analysis, the noun *jitensha* designates a bicycle and is a metonymy for its pedals, which is contradictory.

(2) It is not explicitly explained how the expression *jitensha o kogu* implies "propel a bicycle".

This article holds that the noun *jitensha* is not a metonymy and that the verb *kogu* means metonymically "propel a bicycle (which is the referent of the object) by pumping its pedals".

This analysis applies to other expressions, such as *denkyu ga kireru* "a light bulb burns out", *sentakuki o mawasu* (lit. "rotate a washing machine") "turn on a washing machine", etc. Creation verbs such as *nigiru* (lit. "hold") in the expression *sushi/onigiri o nigiru* "make a sushi/rice ball", are derived through the same process. There are verbs whose metonymic meanings have undergone further semantic changes: *haru* "hold (a drinking party)" which comes from *haru* "spread", *kaku* "write" which comes from *kaku* "scratch".

Keywords: metonymy, active zone, polysemy, semantic change, creation verb

